感想 六月号

哲學への通路

田邊元

従来の哲学に對し、問題の提起とその解答の主たる通路となったものは二つある。一は存在であり他は自由である。希臘哲学は存在を通路として存在の何たるかを問い、獨逸觀念論は自由を通路として概念的に自由を確認せんとする。即ち存在論と自由論とが西洋哲学の二つの典型的形態である。此二つに對して、中世哲学をはさんで其思索が神を通路とするが故に神学的として特色附け、デカルトやヒュームの意識を通路とする近世哲学を現象学的として別の型に區別することも一應出来る。併し中世の神学的哲学が其思索方法の所依とした（のは）専ら希臘哲学であることから、それが存在論の外に立つものでないことは明かであり、而してデカルト、ヒュームの現象学的哲学が意識を存在の性格に於て採（り）、それの分析に於て存在論的であったことは紛れもない事實である。今日、デカルトを先驅と仰ぎ、ヒュームの業を消極的から積極的に轉ずることを以て其主任務と考へるフッセルの現象学が、獨逸觀念論の傳統に外ならずして、直接希臘の存在論に繋がることは何人も疑はない所であろう。本来獨逸觀念論の特色は、單に意識を哲学の通路とし、

神を最高完全存在として思惟し、加え